重症例に対するステロイド静注療法と経口投与の治療成績では，著効例は静注療法で11例中８例，経口投与で８例中２例であった．長期経過では静注群では非静注群より長期緩解例が多く，手術・死亡に至った例は少なかった．難治性潰瘍性大腸炎に対するアザチオプリン療法では臨床的および内視鏡的に改善がみられる例が多く，ステロイドの減量効果も認めたが，薬剤中止後の rebound と副作用が問題であった．

新しく開発された注腸用ステロイド剤（STE）の多施設共同研究の結果では，本剤の有効性は高いと思われた．また，漢方製剤柴苓湯による治療の共同研究結果についても成績を紹介した．

第42回新潟癌治療研究会

日　時　平成３年２月９日（土）
午後１時30分～午後６時

会　場　新潟東映ホテル２階　朱鷺の間

I. 一　般　演　題

1）フローサイトメトリーによる舌及び口底扁平上皮癌20例の DNA 量の検討

鈴木　克也・陳　　瑞彬
新垣　　晋・中島　民雄
（新潟大学歯学部第一口腔外科学教室）

対象は1985年12月より1990年11月の間に新潟大学歯学部附属病院口腔外科を受診し，舌及び口底原発の扁平上皮癌と診断された20例（舌―12例，口底―８例）で，うち６例が頚部郭清術後の病理学的検索で，１例が臨床的に明らかに頚部リンパ節に転移を認めた．全例についてフローサイトメトリーによる Ploidy，DNA index，Ｓ期％の検索を行い，分化度，悪性度などの病理学的所見とあわせて，リンパ節転移症例と非転移症例について比較検討した．

（1）非転移症例では Aneuploid Pattern が13例中４例（31％）だったのに対し，転移症例では７例中４例（67％）と高率を示した．

（2）平均 DNA index は転移症例が 1.41，非転移症例が 1.09 であった．

（3）平均Ｓ期％は転移症例が 19.05％，非転移症例が 16.6％であった．

2）当科における唾液腺悪性腫瘍についての臨床的検討

坂井　広也・大橋　　靖
星名　秀行・鶴巻　　浩
森　　勝
（新潟大学歯学部口腔外科学第二教室）

最近17年間に当科で扱った唾液腺悪性腫瘍19例について臨床的検討を行った．

性別：男12名，女７名．

初診時年齢：23歳から84歳，平均59.9歳．

発生部位：大唾液腺５例（顎下腺４例，耳下腺１例），小唾液腺14例（口蓋７例，頬粘膜，口底各３例，臼後部１例）．

組織型：粘表皮癌８例，腺様嚢胞癌５例，腺癌４例，腺房細胞癌，多形性腺腫内癌腫各１例．

病期：Stage Ⅰ　３例，Stage Ⅱ　７例，Stage Ⅲ　３例，Stage Ⅳ　６例．

治療法：手術＋化療14例，手術＋化療＋放治５例．頚部郭清術は６例に施行．

組織型別累積生存率：粘表皮癌；５年，10年が 85.7％，腺様嚢胞癌；５年が80％，10年が40％，腺癌；５年，10年が25％．

病期別累積生存率：Stage Ⅰ；５年，10年が 100％，Stage Ⅱ；85.7％，Stage Ⅲ；66.7％，Stage Ⅳ；５年が 41.6％，６年が０％．

3）口腔癌の顎骨浸潤に関する研究

小沢　一嘉・土川　幸三
加藤　譲治
（日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学教室第二講座）

口腔癌，特に下顎骨周囲に発生する腫瘍は比較的容易に顎骨浸潤を示し，腫瘍の進展に伴い顎骨および腫瘍辺縁部では様々な変化が認められるとの報告があるが，その詳細については不明な点も多い．そこで，今回われわれは当科で経験した症例をもとに臨床所見と病理所見を比較検討する試みを行ったので，その概要について報告した．研究対象：腫瘍とともに下顎骨を含めて一塊切除を行った症例の内，摘出物の病理組織学的観察が可能であった一次症例31例，二次症例７例の計38例を対象とした．研究方法：臨床的検討として，術前のＸ線所見における骨吸収の有無とその範囲や骨吸収像，核医学的所見における集積状態等について検討した．病理組織学的検討としては，光顕的に顎骨への骨浸潤を観察し臨床所見と比較検討を行った．結果：腫瘍の顎骨浸潤が進行するに従って，顎骨は破骨細胞主体の骨吸収パターンから腫瘍性骨吸収パターンへ移行して行くものと思われた．